

観光を用いた障害者に対する
偏見解消に関する研究

平成 29 年(2017)

北海道教育大学函館校

国際地域学科地域政策グループ

大山莉奈

目次

第1章	偏見の存在	1
1-1	研究の背景	1
1-2	研究の目的	5
1-3	研究の方法	6
1-4	用語説明	8
第2章	健常者と障害者との「接触」方法	10
2-1	偏見解消に有効的な条件	10
2-2	健常者と障害者が交流する取り組みの事例調査	12
2-3	事例調査の分析	16
2-4	分析から考えられる各領域の性質	23
2-5	考察	25
第3章	個別事例	30
3-1	北海道ユニバーサル上映映画祭	30
3-2	江差町の障害福祉の現状	32
3-3	江差町の観光	33
3-4	江差町でのアンケート調査	36
3-5	結果	37
3-6	分析	45
3-7	考察	44
第4章	おわりに	46
4-1	結論	46
4-2	まとめ	48

謝辞

付録資料

偏見に関するアンケート
自由記述の回答

第 1 章 偏見の存在

現在の日本では、ノーマライゼーションや地域福祉等の理念が広まり、障害者が当たり前で暮らすことができる社会を目指して取り組みがなされている。しかし、障害者に対する社会の理解や態度はまだまだ十分なものではなく、障害に対する偏見が社会に存在しているように思う。この章では、偏見とはどのようなものでどのように生じるものなのか文献調査より把握し、偏見は実際に社会に存在しているのか探る。また、本研究を進めるにあたって用いる「観光」の位置づけについて述べる。そこから研究の目的を見出し、研究の方法について述べていく。

1-1 研究の背景

(1) 偏見のメカニズム

まず、偏見とはどのようなものかを探る。『多文化社会の偏見・差別 形成のメカニズムと低減のための教育』(加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏, 2014)によると、偏見を「ある外集団及びその成員に対する否定的な態度」と述べ、認知、感情、行動の 3 つの成分をもつものと位置づけている(Harding, Proshansky, Kutner & Chein, 1969)。外集団とは自分が属していない集団であり、その対義となる内集団は自分が属している集団である。偏見の成分は、特定の社会集団やカテゴリーに対するステレオタイプの知識や信念であり、このステレオタイプに否定的な評価や感情が加わることで、偏見が形成されるのである。

偏見が生じる原因について、『多文化社会の偏見・差別 形成のメカニズムと低減のための教育』(加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏, 2014)によると、社会心理学では、偏見が生じる原因を個人差に注目した研究、認知傾向に注目した研究、集団間関係に注目した研究の 3 つから検討している(上瀬, 2002)、と述べられている。「個人差」とは、個人の経験により偏見が生じる場合を指し、個人の心理的機能に問題があるとみなされている。1950 年代にはこの理論は支持されていたが、偏見を個人のパーソナリティの問題に起因させるため、個人の心理療法をしない限り偏見の低減を望めないことになる点で限界がある、と述

べられている。「認知傾向」とは、無意識的または自動的なカテゴリー化により偏見が生じる場合を指す。Horowitz&Horowitz(1938)によると、人間をカテゴリー化する際、人種カテゴリー、性別カテゴリー、年齢カテゴリーを基準に用いやすい。さらに、カテゴリーの中でも内集団と外集団に分けて認知する。「認知傾向」の場合、そのとき得ていた知識によってその人間を区別するため、知識によって改善できると考えられる。「集団間関係」とは、自分のアイデンティティを肯定的に保つことにより偏見が生じる場合を指す。自分のアイデンティティがどのような所属集団のメンバーであるかどうかという点を重視している。内集団について肯定的なステレオタイプを形成し、外集団に対して否定的なステレオタイプを形成することで偏見が生じる。

(2)多様性の維持

また、本間篤(2003)は、生物学的観点から偏見が生じる原因について考察している。20世紀以降の人間社会において、異なる価値観や社会的背景を持った存在、社会的弱者といったマイノリティに対する差別や社会的排除がさらに顕在化するようになった。こうした差別が顕在化した例として、第2次世界大戦中にナチスドイツが行ったユダヤ人や障害者に対する大量虐殺が挙げられる。この差別の背景には、当時の生物学的知見に基づく進化論や優生学などといった概念があった。19世紀に登場したダーウィンは、進化論を提唱した人物として有名である。種の起源(1859)において、「生命は自然淘汰を繰り返して、環境に適したものだけが生き残っていく」と述べ、これが進化論の由来であるとされている。ダーウィンの提唱を発端として、19世紀末以降ヨーロッパでは医療技術や公衆衛生の発達による人間の質の低下について語られるようになった。そうした中で優生学という概念が提唱されるようになる。優生学とは、人間の様々な身体的精神的特徴に優劣をつけ、生殖への人為的介入によって「優れた者」の出生を奨励し、「劣った者」の出生を防止することを目指す理論と定義される。以前、日本にもこの理論が基となっている思想があった。日本では1996年まで優生保護法という法律が存在していた。第一条には「優生上の見地から不良な子孫の出生を予防するとともに、母性の生命健康を保護することを目的とする」と記載されている。1996年には「母体保護法」に改題されたが、優生学が根付いていたことが分かる。

しかし、生物学の発展により進化論や優生学に疑問を抱き始める。それは、人間を含むあらゆる生物の遺伝子の本体は DNA であると明らかにされたからである。DNA 研究が進むにつれ、生物は多様性を維持するようにその DNA を変化させることが解明された。大阪大学工学部の四方哲也博士は、進化論の「強いものだけが生き残る」という定説に疑問を抱き、厳しい実験条件においてその条件に強い大腸菌(栄養を取り込みやすい大腸菌)と弱い大腸菌(栄養を取り込み難い大腸菌)を等量混合培養する実験を行ったところ、何度繰り返しても弱い大腸菌が生き残るという事を見出した(本間篤, 2002)。この実験結果は、たとえ強いものだけが生き残るような環境であっても、生物は生命の多様性を維持するような DNA を変化させ、その多様性は常に維持されることを証明したのである。つまり、生物は常に多様な子孫を作り出すように変化するからこそ、種の生存を脅かすような環境変化に対しても生き残ることができると言える。環境に適さず生活する上で障害を持ってしまう者の遺伝子も、生物が持つ多様性を維持するために欠かせない存在だと受け入れることができると考えられる。

(3) 観光と福祉

「観光」を通じて日常生活から一時的に離脱し、余暇の活用による楽しさや安らぎを得られ、それが活力となり労働や家事に精を出すことができる。それは、生活文化の創造であるとともに、人間形成ともなる。

2000 年の社会福祉法の改称・改正に伴い、地域福祉の推進が目指されるようになった。アニマルセラピーや園芸療法などのリハビリテーション、スポーツや旅行を通じたレクリエーションが注目され、余暇の活用による楽しさや安らぎがキーワードとなった。楽しさや安らぎをキーワードとした健康増進や社会参加、世代間交流、生きがいの促進、地域振興が図られるうえで、観光を福祉は密接な関係にあると考えられる。さらに、交通バリアフリー法(平成 12 年)やバリアフリー法(平成 18 年)によって、環境のバリアフリー化が重視されるようになった。それに伴い、ユニバーサルデザインの考えに基づく観光の促進が図られるようになり、ユニバーサルツーリズムに対応した観光地づくりが推進された。ユニバーサルツーリズムとは、すべての人々が楽しめるように創られた観光である。

以上のことを踏まえると、偏見は、人間をカテゴリー化する際に否定的な評価や感情が加わると生じるものであると分かる。そして、その感情や評価は、自分が位置する集団や自分が持つ経験・知識によって否定的になると考えられる。生物学観点から着目すると、進化論や優生学の誕生により人間にもともと社会的排除の思想が根付いていたことも分かった。そして、障害を持った遺伝子も人間が生きていく中で必要な遺伝子で、遺伝子の多様性の維持は重要である。従って、偏見は社会に実際に存在していると考えられる。また、観光と福祉の関係性より、観光を用いることで、地域福祉の推進を図ることができる考える。

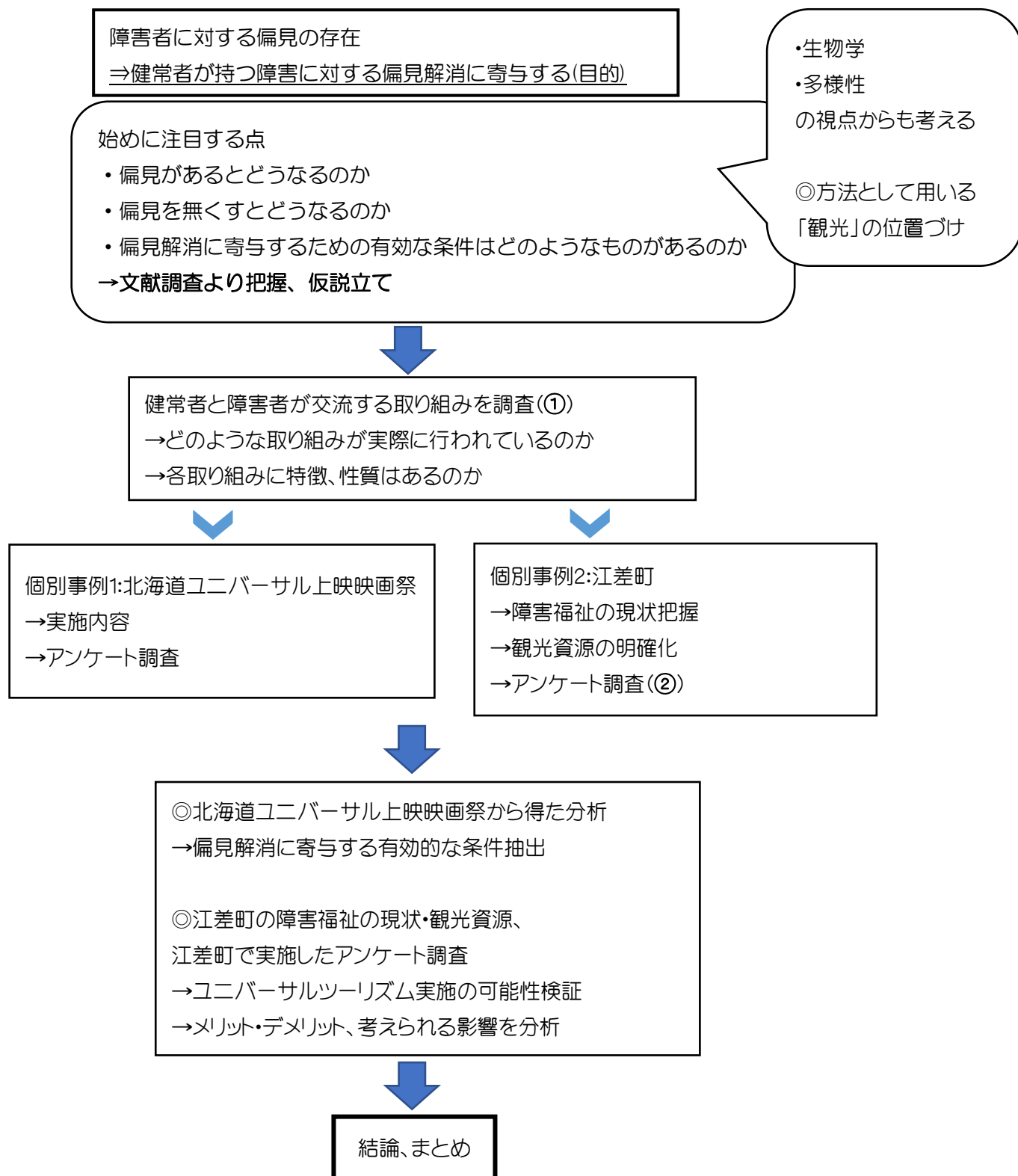
1-2 研究の目的

前述したように、偏見とはある外集団及びその成員に対する否定的な態度である。健常者が障害者に否定的態度をとると、障害者に対する差別行為となる。偏見があることで、差別行為が生じてしまうのである。その差別行為は、障害者の健全な社会生活を阻害してしまい、障害者のアイデンティティの形成や維持が困難となる。このようなことが社会で起きていたら、現在の日本が目指している、障害者が当たり前で暮らす社会をつくることは難しい。健常者が抱く障害に対する偏見を解消することで、日本が目指す社会づくりに一歩近づくことはもちろん、障害者の生活や精神が豊かになると考えられる。また、偏見を解消し、障害に関するステレオタイプの考えを捨てることで、正しい情報を得ることができる。それは、自身の知識として蓄えられるし、互いの類似を発見して肯定的な態度を抱くことができる。障害者を含め社会で暮らす人々がより良い充実した生活を送るためには、偏見の解消が必要であると考えられる。

本研究では、健常者が抱く障害者に対する偏見の解消に寄与することを期待し、そのために必要な条件はどのようなものであるか明らかにすることを目的とする。また、どのような方法がその必要条件を含ませることができ、障害に対する正しい理解が得られるのかを明らかにする。

1-3 研究の方法

本研究は、以下の図のように構成されている(図 1-1)。2 つの調査を実施しており、1 つは健常者と障害者が交流する取り組みに関する調査(①)、もう 1 つは偏見に対する考え方に関するアンケート調査(②)である。①の調査は、健常者と障害者が交流する取り組みを取り上げ、その取り組みの実施主体・目的・内容等より偏見解消に寄与するための必要な条件を分析した。②の調査は、ある地域に暮らす住民に対しアンケート調査を行い、障害に対する偏見についてどのように考えているのか、健常者と障害者が交流する取り組みを行った場合実際に参加したいと思うかどうか等を探った。本研究では、偏見解消に寄与するための方法として観光(ユニバーサルツーリズム)を用い、偏見解消の可能性について考察する。



(図 1-1)

1-4 用語説明

本研究では、障害者や健常者、偏見といった語句が多く用いられる。本研究で用いる語句の定義、また、重要となる語句の定義については以下のようにする。

(1)障害者

障害者基本法（昭和四十五年五月二十一日法律第八十四号）で用いられている定義を引用する。障害者を、身体障害、知的障害、精神障害(発達障害を含む。)その他の心身の機能の障害(以下「障害」と総称する。)があり、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活または社会生活に相当な制限を受ける状態にあるものとする。

(2)健常者

本研究では、障害者基本法に定義されている障害者の対義にあたるものとして位置づける。健常者を、障害がなく、日常生活または社会生活を過ごす上でそれほど制限を受けないものとする。

(3)偏見

前述したように、『多文化社会の偏見・差別 形成のメカニズムと低減のための教育』（加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏，2014）により、偏見を「ある外集団及びその成員に対する否定的な態度」とし、認知、感情、行動の3つの成分をもつものと位置づける(Harding, Proshansky, Kutner & Chein, 1969)。

(4)ユニバーサルツーリズム

観光庁による定義より、ユニバーサルツーリズムは、すべての人が楽しめるよう創られた旅行であり、高齢や障がい等の有無にかかわらず、誰もが気兼ねなく参加できる旅行を目指すこととする。

参考文献

- ・『多文化社会の偏見・差別 形成のメカニズムと低減のための教育』（加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏，2014）
- ・『多様性を基盤とした共生社会の創出に向けて 生物学的観点からの考察』（本間篤，2003）
- ・『偏見解消の心理 対人接触による障害者の理解』（山内隆久，2000）
- ・『障害をもつ人に対する態度—研究の現状と課題—』（川間健之助，1996）
- ・内閣府 障害者基本法（昭和四十五年五月二十一日法律第八十四号）
<http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/kihonhou/s45-84.html>
- ・国土交通省観光庁
<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/manyuuru.html>
- ・ユニバーサルツーリズムの促進に関する支援業務報告書 平成 29 年 3 月
観光庁観光産業課
<http://www.mlit.go.jp/common/001187406.pdf>
- ・『観光福祉論』（川村匡由・立岡浩，2013）

第 2 章 健全者と障害者との「接触」の方法

この章では、偏見解消に寄与するための有効的な条件を文献調査より探る。その条件を含む取り組みを調査し、分析・考察をまとめた。それらを通して、障害を持つ人に対する偏見を解消するためには、どのような条件を持つ方法が有効かについて考える。

2-1 偏見解消に有効的な条件

偏見を解消するための有効的な条件はどのようなものがあるのか。『障害をもつ人に対する態度—研究の現状と課題—』(川間健之助, 1996)によると、障害をもつ人々に対する態度に影響する要因として Jordan(1971)は、①性別、年齢、収入などの人口統計的要因、②接触経験の質と量、③価値観などの社会心理学的要因、④事実に関する知識的要因を示している。三沢(1984)は態度の改善に重要な観点として、①知識・情報の提供、②接触機会の拡大、公正な能力観の普及、④過剰な論争の排除、⑤価値観をあげている。Rees, Spreen, and Harnadek(1991)は、障害をもつ人々に対する態度を改善することを目的とした研究で主に扱われてきた要因は、接触と知識であると述べている。本研究でも、これらで挙げられている「接触」と「知識」に着目して考えていきたい。

まず、「接触」についてである。川間(1996)は、障害をもつ人との接触経験がある人の方がその態度が好意的になるとの結論を得ている研究は圧倒的に多い、と述べている。『多文化社会の偏見・差別形成のメカニズムと低減のための教育』(加賀美常美代・横田雅弘・坪井健・工藤和宏, 2014)では接触仮説(Allport, 1954; Amir, 1969; Cook, 1985; Pettigrew, 1998)について記述されている。接触仮説は、ある条件が成立しなければ接触の帰結が好意的にならない。その条件とは、①対等な地位での接触、②共通目標を目指す協働、③制度的支援、④表面的接触より親密な接触である。Voeltz(1980, 1982)は、接触経験が多い方が「社会的接触の喜び」の因子得点が高いことを認めている。さらに生川(1995)は、「実践的行為」と「他域交流」の次元に接触による違いがあることを報告している。また、ソシオメトリーを用いて通常の学級に在籍する障害を持つ児童の学級での社会的地位を検討した研究(安藤・石部, 1979; 丹生・石部, 1985)では、物理

的距離の接近では心理的距離の接近を促すことができないという結果が得られている。従って、「接触」は共通する目標や目的を持ち、直接的なものが好ましいと考えられる。

次に、「知識」についてである。川間(1996)によると、障害あるいは障害をもつ人々に関する知識が態度に影響を及ぼすことは容易に想像できるが、一貫した結果は得られていない。その中で、徳田(1990)は、視覚障害をもつ人について、点字解読や歩行の映像が何の説明もなく被験者に与えられると「特殊能力を持つ盲人観」が強まることを確認している。また、徳田(1990)は別の研究で、聴覚障害をもつ人について口話法が強調されると特殊能力を持つと理解される危険性を指摘している。従って、正しい知識を得ることは誤った理解が定着することを防ぎ、正しい理解のもとその人物をカテゴリー化することができると考えられる。それは、偏見の形成を防ぐことができ、偏見の解消につながる。

障害者に対する偏見が社会にあることで、障害者の生活に支障をきたし、全ての人々が過ごしやすい社会を目指すことが困難になる。そして、健常者が抱く障害者に対する偏見を解消するための有効的な条件として、障害者と健常者が「接触」し、健常者が障害に関する「知識」を得ることだと考えられる。さらに、「接触」は共通目的を持った直接的なものであることが好ましい。従って、「接触」は「体感性」を持つものであることを条件とする。また、その「接触」を通して正しい「知識」が得られ、継続的に行われることを踏まえ、「啓発性」と「継続性」を持つことも条件とする。

2-2 健常者と障害者が交流する取り組みの事例調査

第1章での研究背景と研究目的で述べてきたことを踏まえ、以下を仮説とする。

仮説：健常者が抱く障害者に対する偏見を解消する方法として、健常者が障害者と「接触」し、「知識」を得る方法が効果的である。また、その「接触」は「体感性」・「啓発性」・「継続性」を持つものである。

この仮説を検証するため、健常者と障害者が「接触」する取り組みを取り上げ、各取り組みがどのような特徴を持つのか調査した。以下より、「交流」を「直接的接触」とする。

現在日本で行われている、健常者と障害者が交流する取り組みを取り上げ、その取り組みの詳細について調べ(表 2-1)、取り組みの実施内容のパターンを3つに分類した(図 2-1)。到達目標という縦軸(啓発性が強いのか、娯楽性が強いのか)、アクションという横軸(知識性が強いのか、体感性が強いのか)を設定し、その2つの軸でマトリクス表を作成した(図 2-2)。また、活動形態という縦軸(継続性が強いのか、単発性が強いのか)、アクションという横軸を設定し、その2つの軸でもう一つマトリクス表を作成した(図 2-3)。取り上げた取り組みがどの性質が強いのか、適した場所に位置し、分析した。また、「啓発性」「娯楽性」「知識性」「体感性」の語句については以下のように定義づける。

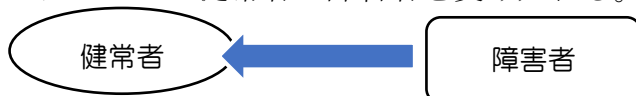
- ・啓発性：障害や障害者についての認識や知識取得を通して、健常者が障害や障害者を理解し、障害に対する偏見の解消を促すものとする。
- ・娯楽性：健常者が障害者と共にその取り組みを楽しむものとする。
- ・知識性：健常者が、障害者が活動する様子を見たり障害者と会話したりすることで、障害者の持つ能力を認識し、障害について知るものとする。
- ・体感性：健常者が障害者と同じ目的を持ち、実際にその目的を協力して達成するものとする。

番号	項目
①	事例名
②	設立主体
③	運営
④	目的
④ ¹	目的の性質(偏見解消であるか、社会福祉事業の普及であるか)
⑤	財源(公的資金がどう入ってくるか)
⑥	民間であるか公共であるか
⑦	営利であるか非営利であるか
⑧	実施内容

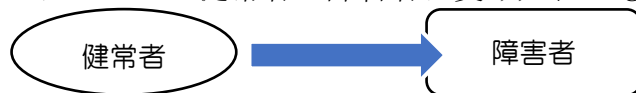
(表 2-1)

【実施内容のパターン】

パターンⅠ：健常者が障害者を受け入れる。

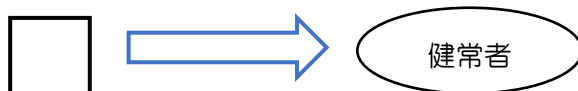


パターンⅡ：健常者が障害者に受け入れてもらう。

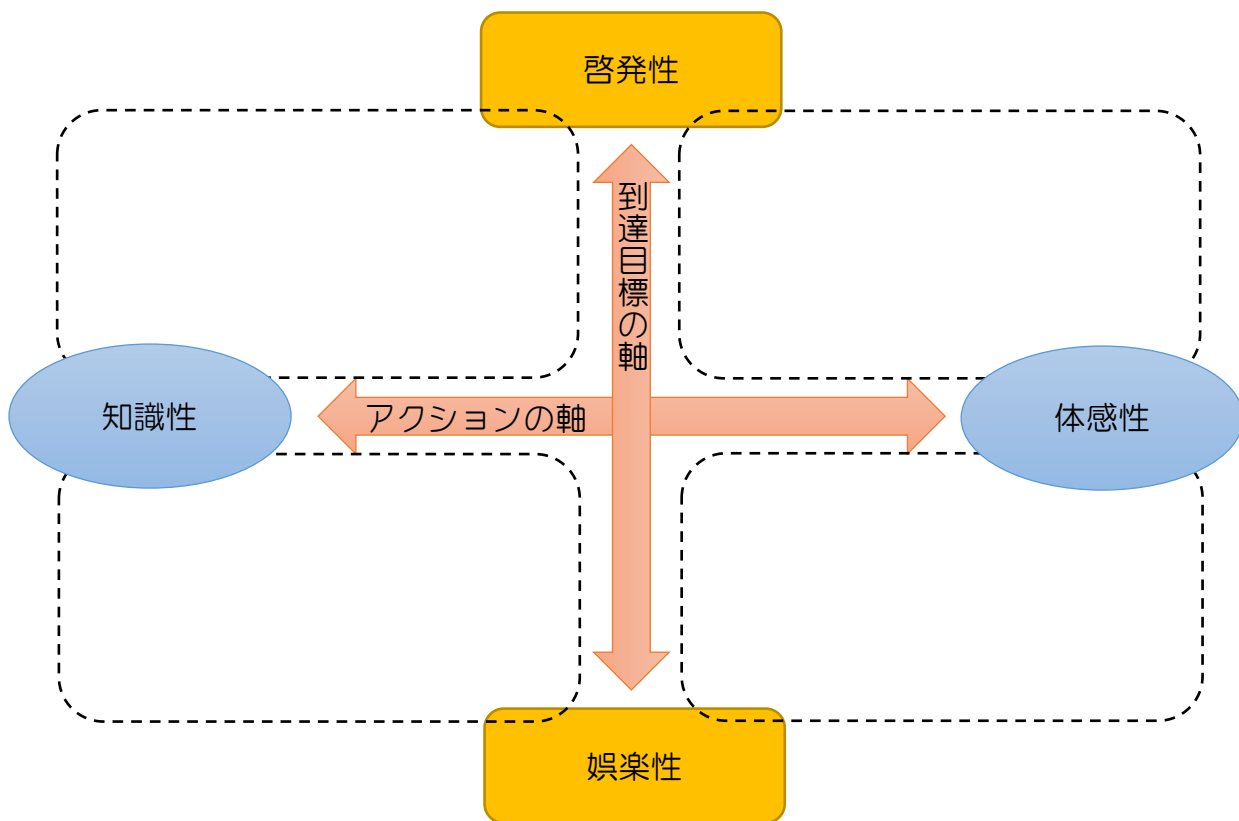


「健常者」「障害者」という枠は、個人に限らず複数であったり、職場・学校・施設といったものも含む。

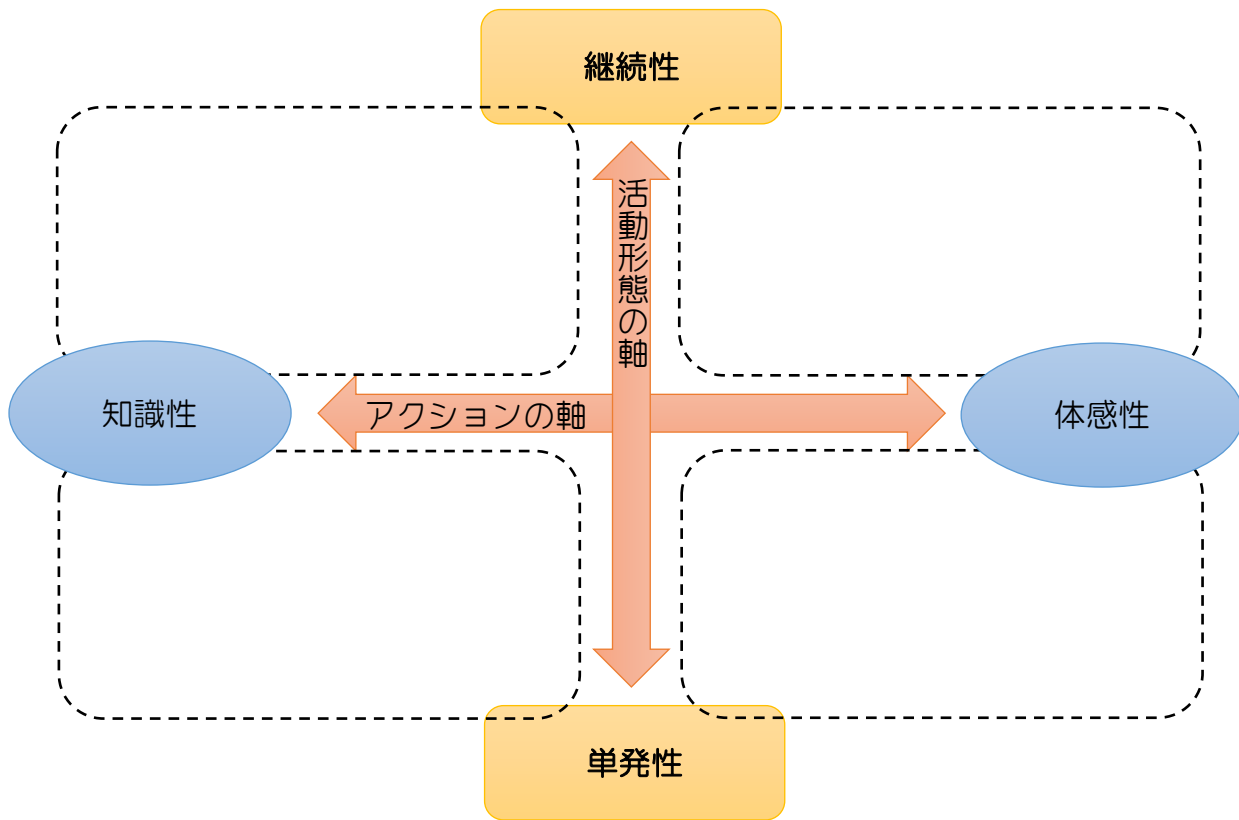
パターンⅢ：健常者が学ぶ。



(図 2-1)



(図 2-2)



(図 2-3)

2-3 事例調査の分析

現在日本で行われている、健常者と障害者が交流する取り組みを探した結果、合計 14 件を見つけ出し、第 1 章で挙げた項目をそれぞれ調べた(表 2-2、2-3、2-3、2-4)。また、各取り組みの内容や目的から判断し、マトリクス表に位置した。結果は図のようになった(図 2-4、2-5)。

番号	①事例名	②設立主体
1	日の出太陽の家	花咲きまつり実行委員会
2	エンジェルテニスカップ	株式会社パソナグループ
3	交流型クライミングイベント	NPO 法人モンキーマジック
4	障害者スポーツ	社会福祉法人円勝会
5	地域サロン Poco a Poco	だて地域包括支援センター
6	高知チャレンジドクラブ	高知県立障害者スポーツセンター
7	筆の里スポーツクラブ	NPO 法人熊野健康スポーツ振興会
8	七瀬の里 N クラブ	NPO 法人総合型地域スポーツクラブ
9	ユニオンスポーツクラブ	NPO 法人ユニオンスポーツクラブ
10	新湊カモンスポーツクラブ	NPO 法人新湊カモンスポーツクラブ
11	兵庫県障害者のじぎくスポーツ大会	兵庫県
12	北海道ユニバーサル上映映画祭	インクルーシブ友の会
13	あいせんまつり	社会福祉法人函館共愛会
14	まちづくりカフェ	江差町

(表 2-2)

番号	③運営主体	④目的
1	花咲きまつり実行委員会、利用者、ボランティア	福祉施設、障害の認知。文化、国際交流、ボランティア活動、地域交流の拡張。
2	パソナグループ社員	身体に障害を持つ方と健常者がスポーツで交流を図る。
3	NPO 法人モンキーマジック	フリークライミングを通して、視覚障害者をはじめとする人々の可能性を大きく広げる。
4	西はりまりハビリテーションセンター	障害者の生きがいづくり。施設の資源を地域に開放し地域との交流を深めることで、障害者福祉の増進に寄与する。
5	だて地域生活支援センター家族の会、社会福祉法人クラブ、ミネルバ病院、伊達市障がい者総合相談支援センター 相談室あい、だて地域生活支援センター、社会福祉法人タラプ i・box、伊達赤十字病院	障がいのある方が集える場の提供。
6	高知県立障害者スポーツセンター職員	スポーツを通じて障害者の健康の維持増進、社会参加を促進。
7	NPO 法人熊野健康スポーツ振興会会員	子供からお年寄りまでそれぞれ好きなスポーツで楽しく健康を図る。
8	七瀬の里 N クラブ事務局、会員	地域住民の世代間を超えた連帯感の高揚、高齢化社会への対応、地域住民の健康・体力の保持増進、地域の教育力の回復。
9	NPO 法人ユニオンスポーツクラブ	子供からお年寄りまで幅広い年齢層で、地域の誰もが生涯を通してスポーツを楽しむ。
10	NPO 法人新湊カモンスポーツクラブ	誰もが気軽に参加できる地域を元気にする。
11	一般財団法人兵庫陸上競技協会、兵庫県水泳連盟、兵庫県卓球協会等	障害者の維持増進と社会参加意欲の高揚、県民の障害者に対する理解と認識を深め交流を広げる。
12	北海道ユニバーサル上映映画祭実行委員	同じ空間を共にする全ての人が感動を分かち合い、みんなで映画を楽しむ。
13	あいせんまつり実行委員	利用者と地域住民との交流を深める。
14	江差町地域包括支援センター	地域の互助づくり。

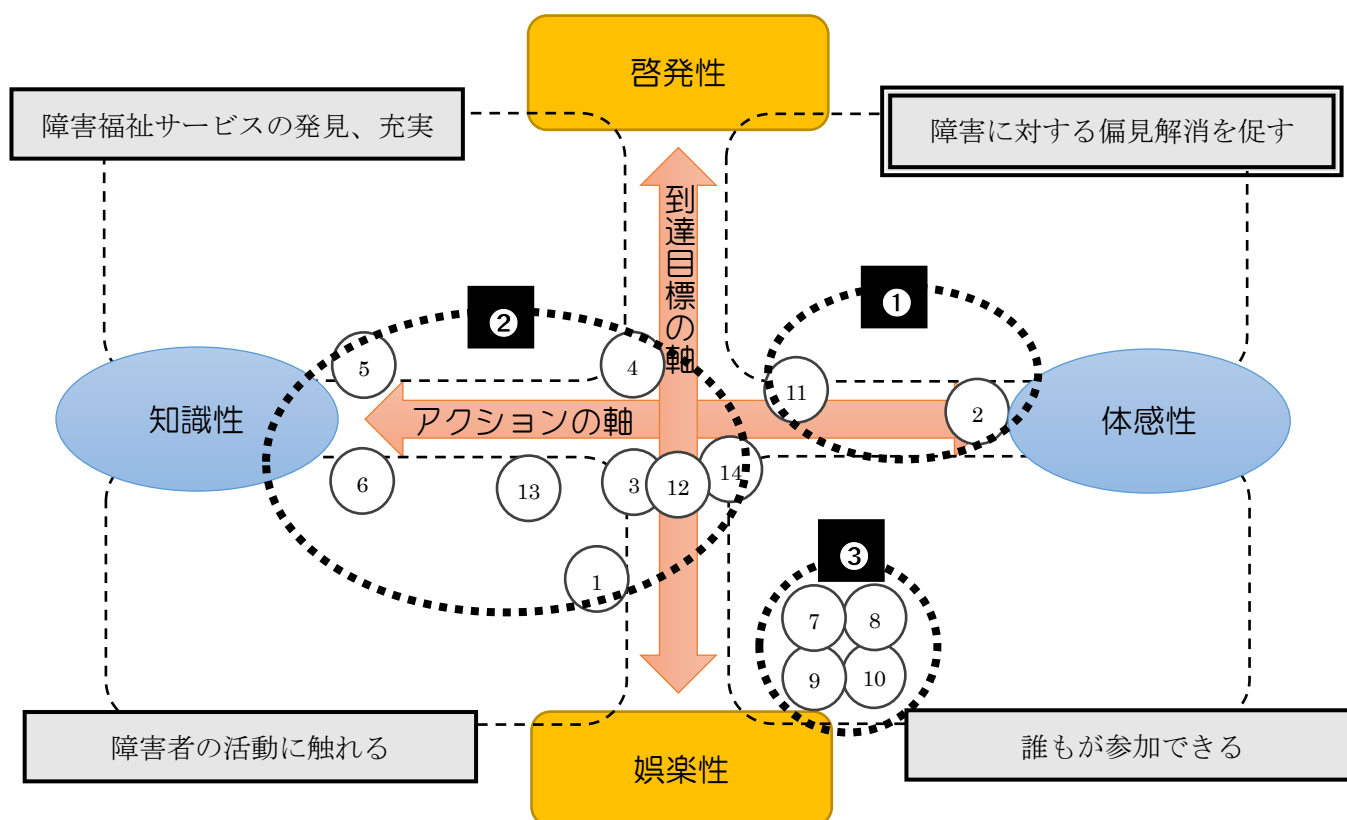
(表 2-3)

番号	④ 目的	⑤ 財源	⑥ 民間／公共	⑦ 営利／非営利
1	社会福祉事業の普及	町の教育委員会、社会福祉協議会等	公共(単発)	非営利
2	偏見を無くす	役職員、スタッフからの募金	民間(単発)	非営利
3	偏見を無くす	一般からの寄付、募金	民間(単発)	非営利
4	社会福祉事業の普及	社会福祉法人円勝会	公共(継続)	非営利
5	社会福祉事業の普及	伊達市	公共(継続)	非営利
6	社会福祉事業の普及	社会福祉協議会、高知県立障害者スポーツセンター、クラブ会員からの会費、施設の借用費	公共(継続)	営利
7	社会福祉事業の普及	クラブ会員からの会費	民間(継続)	非営利
8	社会福祉事業の普及	一般からの寄付、募金	民間(継続)	非営利
9	社会福祉事業の普及	一般からの寄付、募金	民間(継続)	非営利
10	社会福祉事業の普及	クラブ会員からの会費	民間(継続)	営利
11	社会福祉事業の普及	兵庫県教育委員会、公益財団法人兵庫県体育協会等	公共(単発)	非営利
12	偏見を無くす	北海道ユニバーサル上映映画祭実行委員、函館市内の企業・店	民間(単発)	非営利
13	社会福祉事業の普及	社会福祉法人函館共愛会	公共(単発)	非営利
14	社会福祉事業の普及	江差 SC 構想	公共(継続)	非営利

(表 2-4)

番号	⑧内容	パターン	備考
1	イベント、体験・販売コーナー、模擬店	Ⅱ	
2	健全者と障害者とのダブルス、エキシビジョンマッチ、アニマルセラピー	Ⅰ、Ⅱ	
3	クライミングスクールの開催、視覚障害者とのクライミング	Ⅱ	
4	障害者スポーツ大会への参加、スポーツ教室、地域との交流	Ⅱ	
5	様々な方法で活用	Ⅱ	
6	卓球、バドミントン、スキー、釣り、トランポリン、テニス	Ⅱ	目的②：推測(利用料金が明確)
7	ニュースポーツ、武術、体操、手芸	Ⅰ	
8	野球、サッカー、バスケット、バレーボール、太極拳、ダンス	Ⅰ	
9	少年サッカー・テニス・体操等	Ⅰ	
10	体操、テニス、ランニング	Ⅰ	目的②：推測(会費が明確)
11	ボウリング、テニス、卓球、水泳、陸上競技、フライングディスク等	Ⅱ、Ⅲ	
12	映画の上映、イベント	Ⅰ、Ⅲ	
13	利用者の作品展示、縁日、太鼓の演奏、踊り	Ⅱ	
14	町民がやりたいことについて意見を話し合う。	Ⅰ	

(表 2-5)



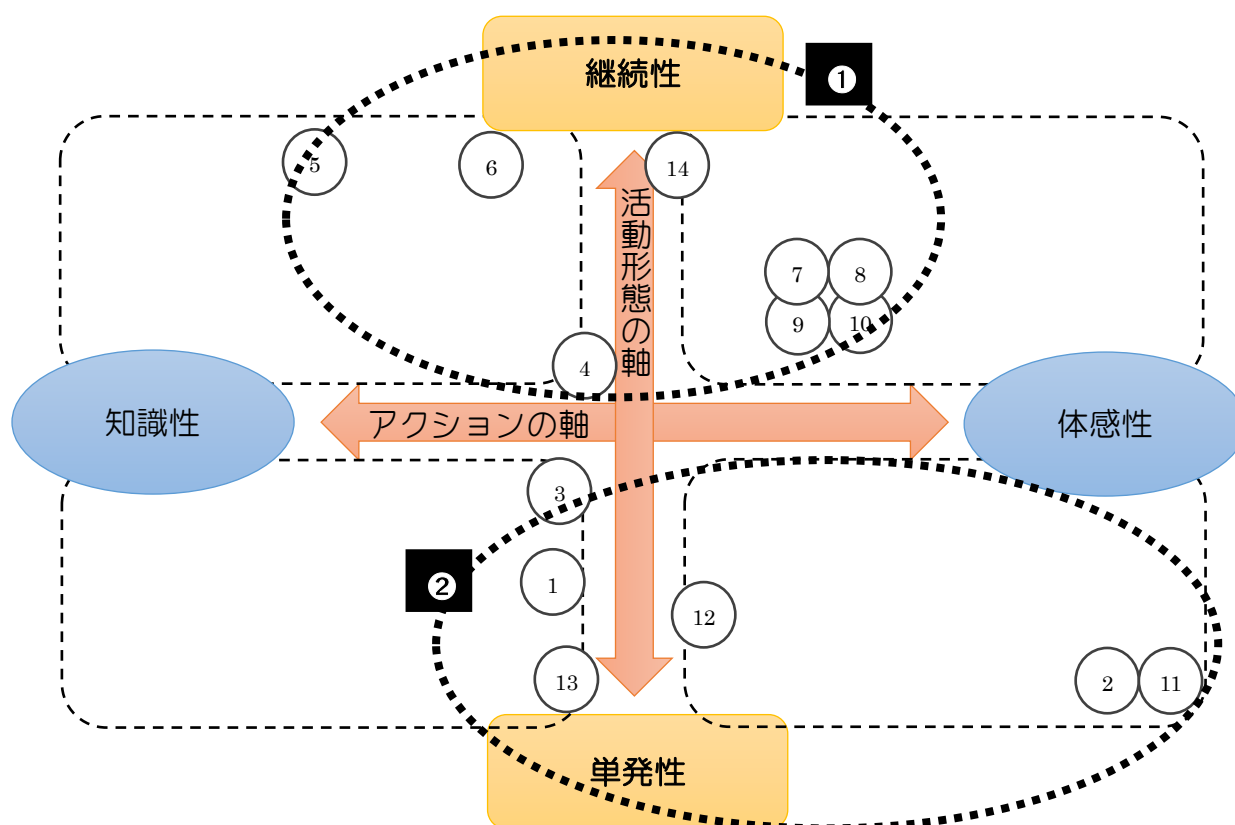
(図 2-4)

縦が到達目標の軸(取り組みの到達目標が啓発性の強いものか、娯楽性の強いものか)、横がアクションの軸(健常者の得られる行動が知識性の強いものか、体感性の強いものか)で構成されたマトリクス表では、各取り組みは上記のように位置された。

①にあたるグループを「啓発系イベント」とする。これは、障害者との活動を通して健常者が障害に対して理解を得ることを到達目的としている取り組みであり、イベントとして行われている。啓発性と体感性が強い傾向にある。今回調査した事例の中では「障害の理解」を目的とした取り組みはわずかにあったが、「偏見解消」までを目的としているものはなかった。このことから「啓発系イベント」はあまり実施されていないことが分かる。

②にあたるグループを「障害者対象イベント」、障害者を対象としたイベントが多い。健常者がそのイベントの開催を知ったり、見たり、あるいは実際に参加したりすることで、障害者の潜在能力を知り、障害福祉サービス向上のきっかけとなることを到達目標としている取り組みが多い。知識性が高いと考えられる典型的な事例として「5.地域サロン Poco a Poco」が挙げられる。これは、障害者が集える場所を提供する取り組みである。

③にあたるグループを「健康増進イベント」とする。対象をこだわらず、スポーツを楽しむことを到達目標としていて、体感性と娯楽性が強い傾向にある。体感性が高いと考えられる事例として「6.高知チャレンジドクラブ」や「9.ユニオンスポーツクラブ」などが挙げられる。これらは、スポーツを通じて健康増進や人との交流、社会参加の促進を図る取り組みである。



(図 2-5)

縦が活動形態の軸(取り組みの内容が継続性の強い、単発性の強いものか)、横がアクションの軸(健常者の得られる行動が知識性の強いものか、体感性の強いものか)で構成されたマトリクス表では、各取り組みは上記のように位置された。

①にあたるグループを「健康増進・地域振興イベント」とする。スポーツクラブの取り組みやスポーツを題材にしたイベント、地域振興を図る取り組みが多い。一年を通して健康増進や地域振興を図る内容の取り組みが多いことから、継続性が高いことが分かる。

②にあたるグループを「単発イベント」とする。イベントとして開催している取り組みが多く、単発性が強い傾向にある。

2-4 分析から考えられる各領域の性質

到達目標という縦軸(啓発性が強いのか、娯楽性が強いのか)、アクションという横軸(知識性が強いのか、体感性が強いのか)で構成されるマトリクス表では、取り組みの性質を4つに分けられると考える。

1 つ目は、啓発性と知識性が強い領域である。啓発性と知識性が強いものは「障害福祉サービスの発見、充実」を促すものであり、障害者に対する福祉サービスを発見し、充実させることを重視した取り組みである。健常者がその取り組みを通して障害について知り、障害者も地域の一員として生きる社会づくりの大切さに気づくことを促す。

2 つ目は、啓発性と体感性が強い領域である。啓発性と体感性が強いものは「障害に対する偏見解消を促す」ものである。これは、障害者との活動を通して得られた理解により、障害に対する偏見解消を促すことを重視した取り組みである。健常者は、障害者と共に何かを成し遂げることを体験することで、障害に関する正しい理解が得られる。その理解が偏見解消を促す。

3 つ目は、娯楽性と知識性が強い領域である。娯楽性と知識性が強いものは「障害者の活動に触れる」ものである。これは、健常者が障害者の生活や障害者対象の活動に参加する取り組みである。障害者の生活や活動を目の当たりにすることで、健常者は障害者の持つ能力を知ることができる。

4 つ目は、娯楽性と体感性が強い領域である。娯楽性と体感性が強いものは「誰もが参加できる」ものである。これは、参加者を限定せず、娯楽性を重視した取り組みである。健常者は楽しみながら、障害者と共に何かを成し遂げることを体感する。

仮説：健常者が抱く障害者に対する偏見を解消する方法として、健常者が障害者と「接触」し、「知識」を得る方法が効果的である。また、その「接触」は「体感性」・「啓発性」・「継続性」を持つものである。

この仮説に基づいた効果的な方法は、啓発性と体感性が強い「障害に対する偏見解消を促す」領域に属することが条件であると考えられる。また、偏見解消の促進を継続的に行うことが好ましいとして、継続性が強いことも条件の一つである。しかし、その領域に属する取り組みは少なく、障害への理解を目的としている取り組みは、単発性が強いものが多いことが明らかとなった。また、各取り組みに参加した健常者が、実際に偏見解消につながったかは今回の事例研究で

は明らかになっていないため、仮説は成り立たないを考える。

この事例研究を通して、健常者が障害者と「接触」する取り組み全てが偏見解消を促すものではなかったということが分かった。しかし、偏見への理解を目的としている取り組みは「障害に対する偏見解消を促す」領域に属していることから、啓発性と体感性を持つものは、偏見解消につながると考えられる。「障害に対する偏見解消を促す」領域に属する取り組みは、イベント等の単発性の強いものが多い。気軽に参加しやすく、一度に多くの参加者を見込めるので障害に対する理解を得る手段としては効果的であると考えられる。

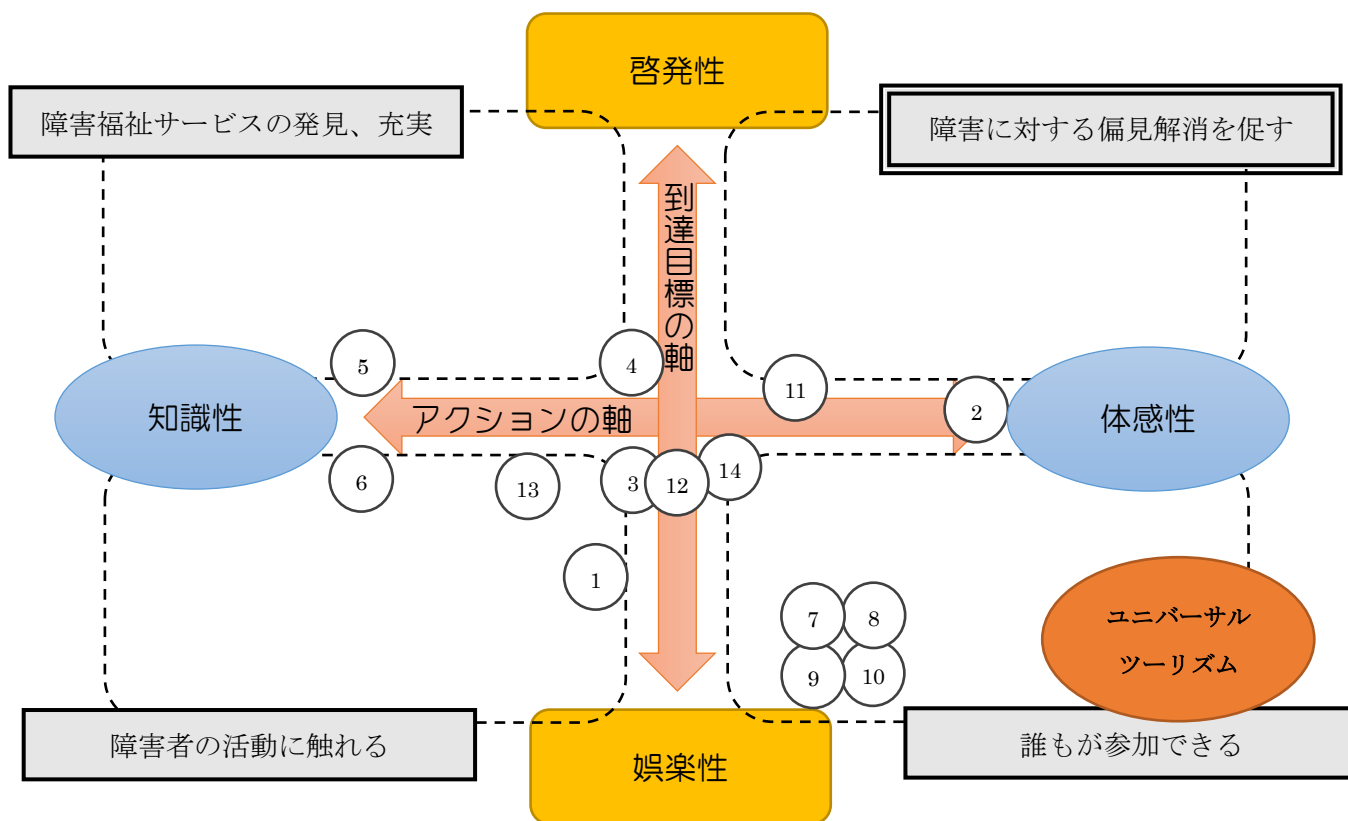
2-5 考察

研究結果の分析より、障害に対する偏見を解消するための方法に有効的な条件は、啓発性、体感性、単発性を持つことであると考えられる。この条件を盛り込めるものとして「ユニバーサルツーリズム」を手段として用いる。

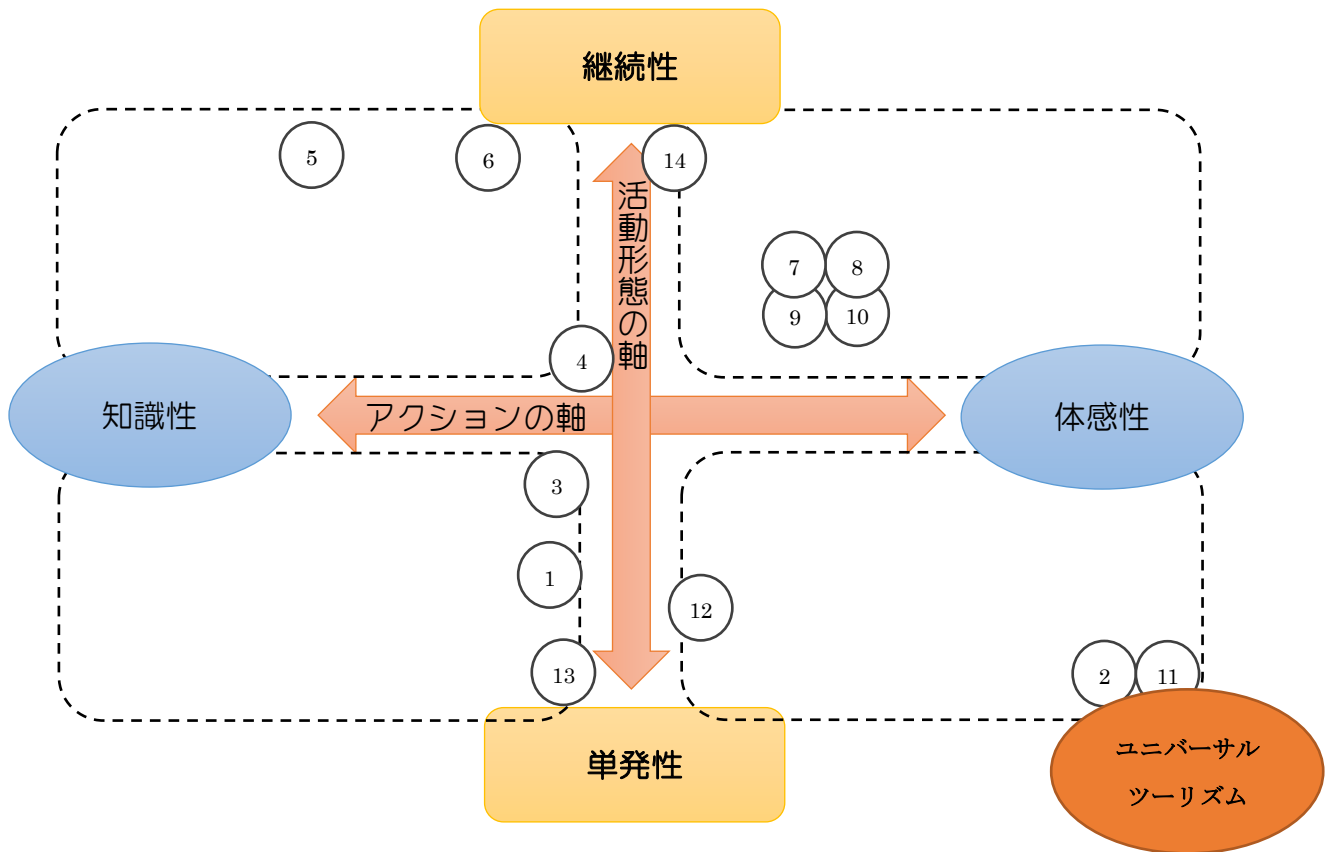
現在日本では、ユニバーサルツーリズム促進事業を実施しており、誰もが安心して旅行を楽しむことができる環境を整備するため、地方自治体、NPO等の幅広い関係者の協力の下、地域の受入体制強化を進めるほか、旅行商品の造成・普及のための取組を実施し、ユニバーサルツーリズムの普及・促進を図っている。

実際にユニバーサルツーリズムを実施している旅行会社はいくつかある。H.I.S.では「ユニバーサルツーリズムデスク」というものを掲げ、高齢や障害等の有無に関わらず気兼ねなく出かけられる様々な旅の形を目指している。内容は基本的に添乗員が同行する団体旅行となっている。車椅子や杖を利用している歩行困難者対象のもの、聴覚障害者対象のものがある。国内旅行だけではなく、海外旅行にも対応している。また、JTBでは、高齢者対象、小さい子連れの家族対象、外国人対象、透析治療が必要な人対象のものを扱っている。こちらも添乗員の同行が基本となっており、団体旅行のものが多い。

これらを踏まえると、ユニバーサルツーリズムは、添乗員の同行がある団体旅行のものが多いことが考えられる。そして、先程提示したマトリクス表にユニバーサルツーリズムを当てはめてみる。ユニバーサルツーリズムは「全ての人々に楽しんでもらう」ことを目的としていることから、娯楽性と体感性が強いものだと考えられる。また、旅行の内容は継続的なものではないため、単発的であることから以下の位置に属する(図 2-6、2-7)。従って、ユニバーサルツーリズムは娯楽性、体感性、単発性の強いものであり、添乗員が同行する団体旅行が望ましいと考えられる。さらに、旅行先の地域の受け入れ態勢を整えることも重要であると言える。



(図 2-6)



(図 2-7)

参考文献

- ・ 社会福祉法人太陽福祉協会
<http://taiyonoie.org/>
- ・ 社会福祉法人日の出町社会福祉協議会
<https://hinodeshakyo.jimdo.com/2017/04/20/%E8%8A%B1%E5%92%B2%E3%81%BE%E3%81%A4%E3%82%8A%E3%83%9C%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%82%A2%E5%8B%9F%E9%9B%86/>
- ・ PASONA
<http://www.pasonagroup.co.jp/koken/tennis.html>
- ・ PRTIMES
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000047.000016751.html>
- ・ NPO 法人モンキーマジック
<https://www.monkeymagic.or.jp/magic>
- ・ 社会福祉法人円勝会
<http://enshoukai.com/home>
- ・ 地域の障害者の生きがいに繋がる障害者スポーツの推進
https://www.keieikyo.gr.jp/data/tiki5_05.pdf
- ・ IV 地域住民と関係者との連携した障がい者の支援体制の確保
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/shf/grp/05/jorei-gaidline05-3.pdf>
- ・ 高知県立障害者スポーツセンター
<http://www.kochi-scf.com/>
- ・ NPO 法人熊野健康スポーツ振興会
<http://www17.plala.or.jp/kumanokss/index.html>
- ・ NPO 法人 N スポーツクラブ
http://daisyphoto.tank.jp/htdocs/?page_id=13
- ・ おおいた NPO 情報バンク 「おんぼ」
http://www.onpo.jp/npolist/item_3066.html
- ・ NPO 法人ユニオンスポーツクラブ
<http://www.union2004.com/>
- ・ NPO 法人新湊カモンスポーツクラブ
<http://shinspo.com/>

-
- ・宝塚市 兵庫県障害者のじぎくスポーツ大会
<http://www.city.takarazuka.hyogo.jp/kenkofukushi/shogaisha/1014782.html>
 - ・第 11 回兵庫県障害者のじぎくスポーツ大会 実施要綱
http://www.city.ono.hyogo.jp/user/filer_public/ce/c2/cec2a47a-5638-4f2e-baea-ee067941d9eb/shi-shi-yao-gang.pdf
 - ・文部科学省 総合型地域スポーツクラブ育成マニュアル
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/club/main3_a7.htm
 - ・ユニバーサル上映映画祭
<http://inclusive-t.com/hokkaido-universal-movie/top.html>
 - ・北海道ユニバーサル上映映画祭公式サイト
<http://inclusive-t.com/hokkaido-universal-movie/top.html>
 - ・国土交通省観光庁
<http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/sangyou/manyuaru.html>
 - ・ユニバーサルツーリズムに対応した観光地づくり事例集 平成 27 年 3 月
<http://www.mlit.go.jp/common/001095302.pdf>
 - ・H.I.S.
<https://www.his-barrierfree.com/travel/>
 - ・JTB
<http://www.jtb.co.jp/jut/#elderly>
-

第 3 章 個別事例

この章では、健常者と障害者が交流する取り組みの一つである「北海道ユニバーサル上映映画祭」を取り上げ、偏見解消に寄与する方法に必要な条件を探る。また、北海道の南に位置する江差町をフィールドとし、その地域でのユニバーサルツアーリズムの実施を検討すべく、江差町の障害福祉の現状と観光について探る。地域にこだわらない広い範囲の参加目的を持つ北海道ユニバーサル上映映画祭と、江差町という地域にこだわったユニバーサルツアーリズムは、健常者と障害者との接触が図られる点は共通しているが、健常者と障害者との「接触」の方法は異なる。その点を比較しつつ、考察する。

3-1 北海道ユニバーサル上映映画祭

事例の一つである、北海道ユニバーサル上映映画祭を例に挙げ、偏見解消の寄与が期待される方法に必要な条件について考えていく。

北海道ユニバーサル上映映画祭とは、障害の有無や種別を問わず、誰もが楽しむことのできる映画観賞を目指した映画祭である。北海道の南に位置する函館市・北斗市・七飯町の行政区の枠を超えた3地域にて、毎年開催されている。この映画祭の特徴は、全ての上映作品に音声ガイド・ミュージックサイン(挿入歌や効果音などの音声情報をボディージェスチャーなどで表現すること)・日本語字幕などのユニバーサル上映環境を、オープンライブ方式で実施していることである。

平成 28 年に開催された北海道ユニバーサル上映映画祭函館上映会では、「障害について考えよう！映画感想トークセッション」という企画を実施された。この企画は、映画を見た感想や考えたことを用紙に書いてもらいそれを回収し、観客全体に紹介し意見を共有するというものである。この企画の目的は、参加した観客に対し障害について知る機会を設け、障害に対する偏見を解消し正しい理解を深めることであり、知識性が強いものである。この企画に参加した観客に対し、「企画に参加する前と後で障害に関する理解や関心が深まったかどうか」という質問を含んだアンケートを行った。アンケート回答者 79 名のうち、企画に参加した観客は 23 名であった(未回答者は除く)。その 23 名のうち、「企画に参

加する前と後で障害に関する理解や関心が深まったかどうか」という質問に対し、「はい」と回答した者が 16 名、「いいえ」と回答した者は 1 名、「変わらない」と回答した者は 6 名であった。「はい」と回答した者の人数が全体の過半数を上回る数であったことから、障害に関する知識を得ることは、障害への理解を促すことができると考えられる。しかし、全員が理解を深めたわけではないため、知識性だけでは多くの人々の偏見解消を促すことができない。

これらを踏まえると、知識性が強い取り組みは障害への理解を促すことができるが、その障害への理解が全て偏見の解消につながるわけではないということが分かる。従って、障害に関する「知識」を得るだけでなく、健常者と障害者の直接的な「接触」が必要であり、健常者と障害者が協働することが偏見解消を促す重要な点であると考えられる。



(写真：平成 28 年 6 月 19 日北海道ユニバーサル上映映画祭七飯上映会の様子)

3-2 江差町の障害福祉の現状

江差町は北海道の南西部に位置する、北海道文化発祥の地である。ニシン漁が盛んに行われている。町名の「江差」は、アイヌ語で昆布の意味を持つ「エサシ」からきている。総面積は 109.53km²、人口は住民基本台帳(平成 29 年 3 月 31 日現在)によると、7,956 人である。

第 4 期江差町障がい福祉計画(平成 27 年度～平成 29 年度)によると、身体障害者手帳所持者数は、平成 26 年度末現在で 585 人と、総人口(8,335 人)に占める割合は 6.86%である。障害種別では、肢体不自由(運動機能障がい)が 60%、内部障がい(聴覚障がい)が 25%となっており、総人口の 7/100 人の方が身体に障がいがある。知的障がいのある方(療育手帳の所持者)は、平成 26 年度末現在で 191 人と、総人口に占める割合は 2.29%である。障がいの程度別では、A 判定(最・重度)が 48%、B 判定(中・軽度)が 52%となっている。精神障害者保健福祉手帳の所持者数は、平成 26 年度末現在で 43 人と、総人口に占める割合は 0.5%である。等級別では、1 級の重度障がい者が 18.6%、2 級が 46.5%と最も多く、3 級の割合が 34.9%となっている。

江差町、または江差町近辺には、施設入所支援・生活介護事業所、生活介護・就労継続支援 B 型事業所、障害者相談支援・特定相談支援・障害児相談支援事業所、通所介護事業所、居宅介護支援事業所、共同生活援助(介護サービス包括型)事業所、知的障害者就労支援施設、共同生活援助(外部サービス利用型)事業所、認知症対応型共同生活介護施設等の施設が数多く経営されている。「あすなろ学園」はその数多くある施設の 1 つであり、施設入所支援・生活介護事業所として経営している。「あすなろ学園」は、知的障害者福祉法に基づく更生施設として、主に 18 歳以上の知的障害者を入所させ保護するとともに、施設利用者の多種多様な個人のニーズに対応し、且つそれぞれの特性・能力に応じた生活・作業指導を通して、より豊かなライフステージの創造が模索かつ実現できるよう、専門的「治療・教育」機関としての役割を十分に踏まえ処遇することを目的としている。音楽療法やアクアセラピー、北欧諸国との国際交流など様々な活動を取り入れ、利用者の状況とニーズに合わせたサービスを行っている。

これらのことから、江差町には身体障害者が最も多く暮らしていることが分かる。また、多様な施設が多く経営されていることから、障害福祉サービスの充実と向上のための取り組みがなされていることが分かる。

3-3 江差町の観光

(1) 観光戦略

江差町が策定する「江差町まち・ひと・しごと創生総合戦略」によると、江差に懐かしさと魅力を感じる若者が集う町となることを最終目標とし、江差らしさがあり、若者が持続的に働くことができる仕事をつくっていくことの必要性が述べられている。そのためのアクションプランは主に3つあり、そのうちの1つに「江差文化体験交流づくりで仕事をつくる」というものがあり、江差町の観光に対する戦略が掲げられている。その戦略の具体的な内容は、江差町観光戦略書案の中で「江差を磨く」「江差を発信する」「江差に誘う」「江差で憩う」「江差を経営する」といった5つの視点より考案されている。「磨く」は地域資源の掘り起こし・磨き上げ・保全を指し、エコツーリズムの推進・大学と地域の連携・民博修学旅行や長期滞在旅行への対策が挙げられている。「発信」はコンテンツを利用した集客を促進するPR活動を指し、外国人観光客による情報収集方法と宿泊施設の手配やSNSの活用が挙げられている。「誘う」は地域動線の形成と広域連携の推進による観光誘客の増加を指し、広域連携の法の整備や広域連携による人口減少社会への対策が挙げられている。「憩う」は観光者の長期滞在化の促進を指し、コンテンツツーリズムの活用や地域ブランド化の推進等が挙げられている。「経営する」はKPIとPDCAサイクルによるマネジメントとDMO推進体制の構築を指す。地域に訪れた人に喜んで消費してもらう質の高い観光地づくりをするためには、価値・消費・需要・環境の創造が大切である。それらの要素を構成するためには組織の創造が求められ、全体としての地域経営を行う主体としてDMOが必要となる。

平成29年4月28日、江差町が「日本遺産」に認定された。江差町の認定は、北海道では第1号の認定となる。「日本遺産」とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として認定し、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を総合的に活用する取組を支援する制度で、文化庁が平成27年度から始めた。江差町のストーリーのタイトルは「江差の五月は江戸にもないーニシンの繁栄が息づく町ー」で、海と共に生きてきた江差町の町並みは、江戸時代から明治時代にかけてのニシン漁とその加工品の交易によって形成されたものであることを伝えている。ニシンによる繁栄は、江戸時代から伝承されている文化とともに、

今でもこの地域に色濃く連綿と息づいていると述べられている。海と共に生きてきた街並み、ニシン漁の繁栄により造られた建物、ニシンを用いた郷土料理をストーリーと共に紹介している。

また、北海道の自然百選の中の一つである「かもめ島」、国指定重要文化財である「旧中村家住宅」、北海道指定有形民俗文化財である「横山家」等、自然豊かな景色や歴史あふれるスポットが多くある。江差町で行われる祭りも注目されていて、「江差かもめ島まつり」「江差・姥神大神宮渡御祭」「江差追分全国大会」の3つは江差の三大祭りと呼ぶ。

これらを踏まえると、江差町の観光は自然や歴史に関するスポットが多い。従って、江差町を歩いて様々なスポットを見ることが、江差町の魅力を感じられる一つの方法であると考えられる。



写真① かもめ島



写真② いにしえ街道



写真③ 江差・姥神大神宮渡御祭

写真① http://www.hokkaido-esashi.jp/uploads/fckeditor/sightseeing/3dai_matsuri/kamomejima/kamomejima.jpg

写真② http://www.hokkaido-esashi.jp/uploads/fckeditor/sightseeing/shisetsu_meisyo/inishiekaidou/inishiekaidou.jpg

写真③ http://www.hokkaido-esashi.jp/uploads/fckeditor/sightseeing/3dai_matsuri/ubagami/matsuri_03.jpg

(2) 偏見解消、ユニバーサルツーリズムに関連した動き

江差町役場地域包括支援センターが実施する江差町地域包括ケアシステムでは「医療」「介護」「住まい」の3つを柱とし、住民のニーズが充足するよう連携・調整を行うことが掲げられている。それに伴い、個別ケース相談や24時間緊急電話対応、老人クラブ支援、出前制度勉強会等の取り組みがなされている。

「認知症キャラバンメイト・サポーター養成」という取り組みでは、江差町に暮らす小学生4・5年生を対象に認知症講座を行っている。江差町の地域包括支援センターは、認知症などの偏見の対象となりやすい症状や病気に関する知識を子供のときに得ておく大切さを重視し、「知る」機会を提供することを推進している。また、「転ばん塾」「いきいき健康教室」といった健康増進目的の取り組みでは、対象参加者に加えて健常者も参加し、共に活動することでより深い知識が得られることを期待している。

江差町近郊に乙部町という地区があり、そこには「バリアフリーホテルあすなろ」というホテルが営業している。そのホテルはハード面とソフト面のバリアフリーを徹底しており、障害を持つ方や高齢者の方も快適に過ごせるよう整備されている。具体的な内容は、風呂・サウナ専用の車椅子で全移動可能、充実した身体介護・入浴介助・移送、リクライニング式のベッドを各部屋に1つずつ完備等である。

このように、江差町では偏見解消に向けて、知識性の高い取り組みがなされている。また、ユニバーサルツーリズムの推進を図る宿泊施設が存在することが分かる。

3-4 江差町でのアンケート調査

江差町に住む人々は、障害や障害者に関してどう考えているか、障害者と交流する機会があったら参加したいと思うのか探るために、アンケート調査を実施した。江差町地域包括支援センターが実施している取り組みである「まちづくりカフェ」の場を利用し、それに参加している人々に対し調査を行った。「まちづくりカフェ」とは地域の互助づくりを目的とする住民参加型の取り組みであり、住民が地域に必要なだと思ふことを話し合い、それを実際に実行するというものである。アンケートの質問項目は以下の通りである(表 3-1)。「まちづくりカフェ」に参加している人々は江差町民ではない人もいるため、江差町民だけのものとアンケート調査参加者全員のものとして結果を出した。また、このアンケートでは「偏見があるか」という表現を用いず、「抵抗があるか」という表現を用いる。「抵抗」がある場合「偏見」があるとする。

番号	質問項目
1	アンケート記入者の情報(性別、年齢、お住まい、職業)。
2	障害を持った方(精神障害・知的障害・身体障害、認知症等)に対して抵抗があるかどうか。
3	(2で「抵抗がある」と回答した人のみ) どのようなことから「抵抗がある」と感じるか。
4	(2で「抵抗がない」と回答した人のみ) どのようなことから「抵抗がない」と感じるか。
5	障害を持った方と交流する機会、イベント等があったら参加したいと思うかどうか。
6	障害をもった方と交流したときのエピソードやそのとき感じたこと、障害者に対する偏見についての考えや意見。

(表 3-1)

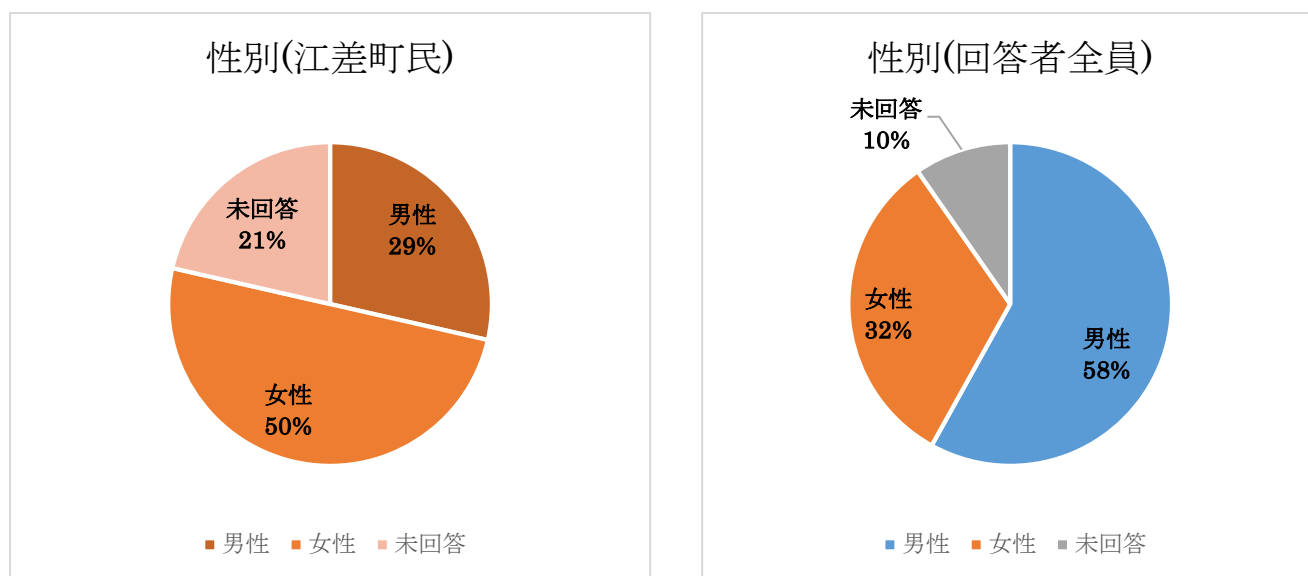
3-5 結果

アンケート調査の結果は、以下の通りになった(図 3-1~3-8)。調査参加者全 31 名のうち、江差町民は 14 名であった。(アンケート用紙、質問項目 6 の自由記述の回答は、付録資料を参照。)

回答者全体で見ると回答者は男性が多いが、回答した江差町民は女性の方が多という結果となった。回答した江差町民は 60 代の年齢が最も多かった。また、江差町民の職業は勤め人が最も多いが、主婦と学生がほぼ同じ割合となった。

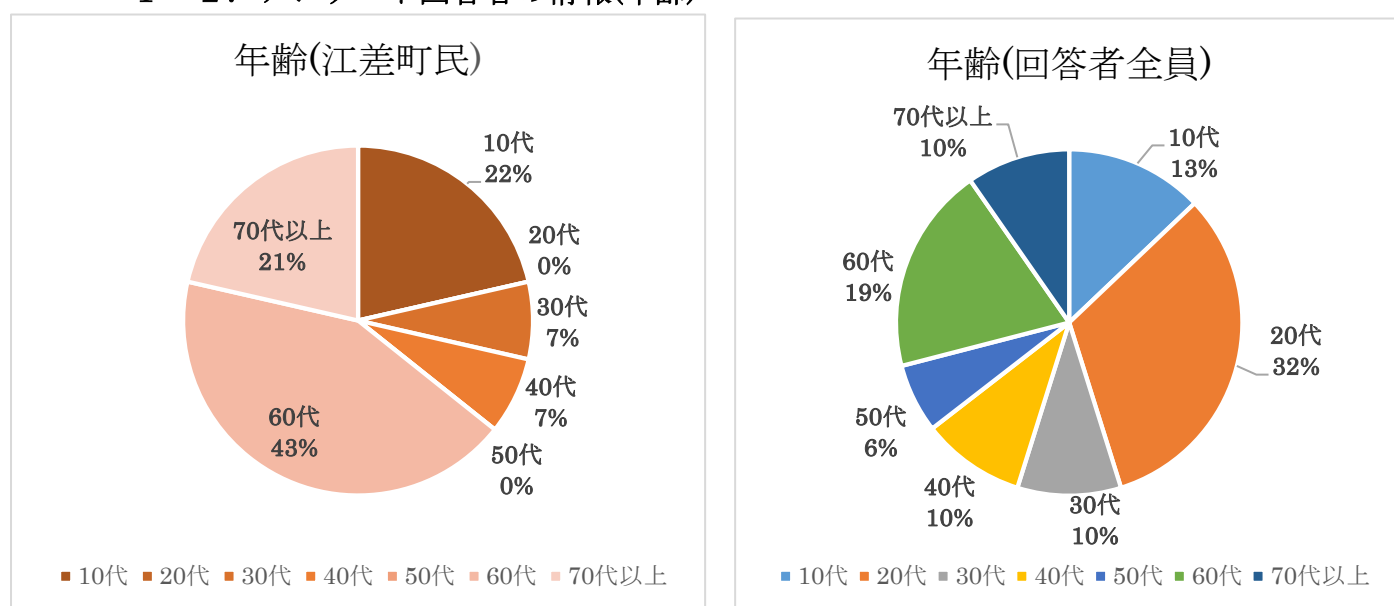
「障害を持つ人に対して抵抗があるか」という質問に対し、江差町民は「ない」と回答した者が最も多く、「障害を持つ人との交流に参加したいかどうか」という質問に対し、「はい」と回答した者が多かった。

1-1. アンケート回答者の情報(性別)



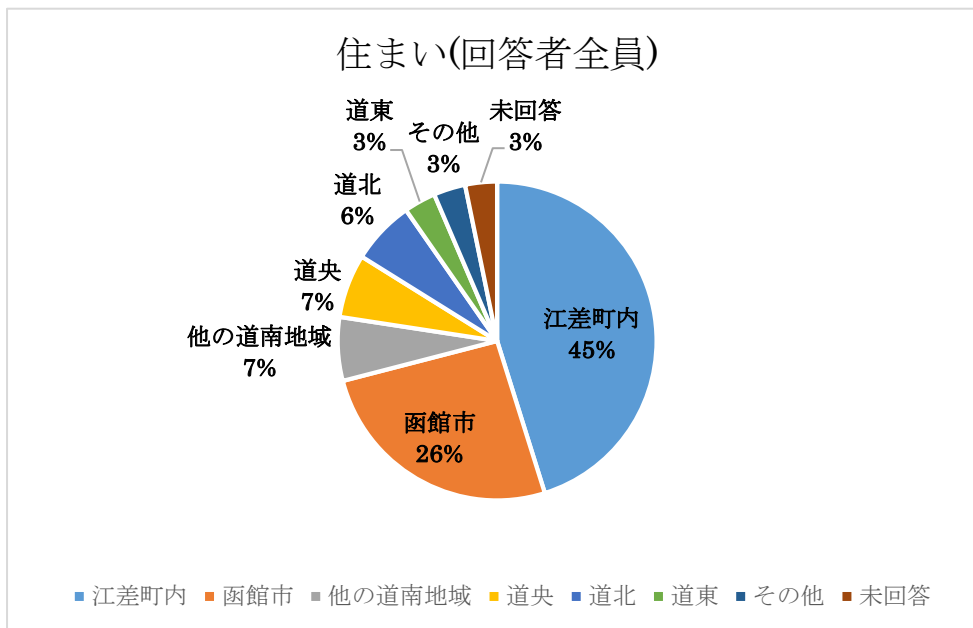
(図 3-1)

1-2. アンケート回答者の情報(年齢)



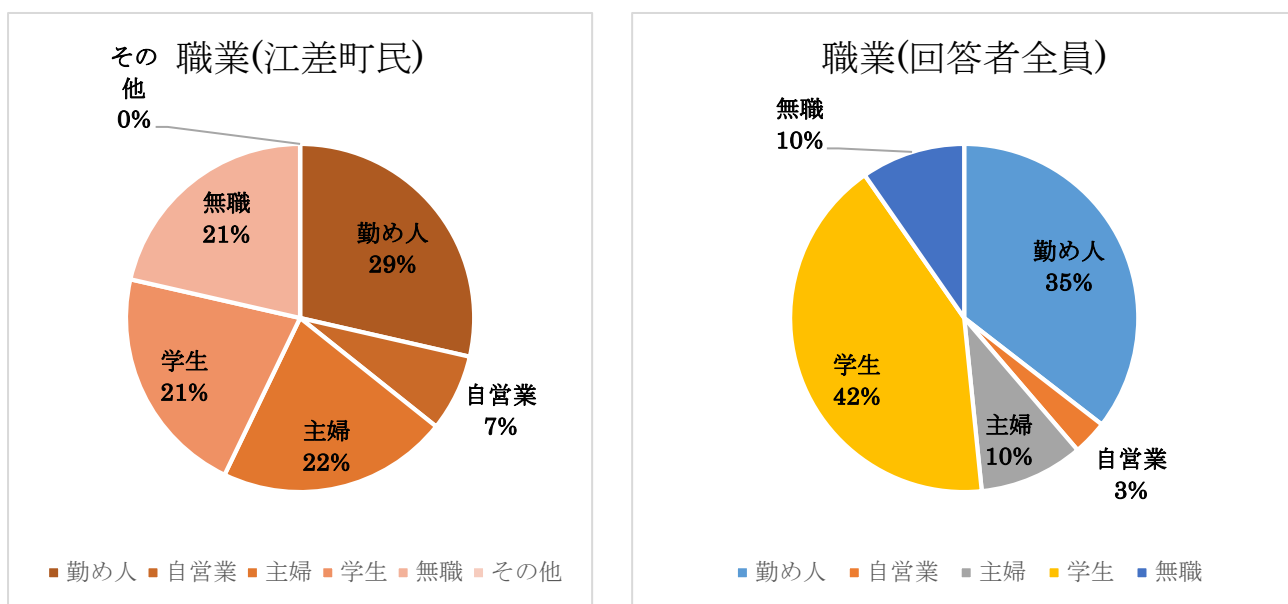
(図 3-2)

1-3. アンケート回答者の情報(住まい)



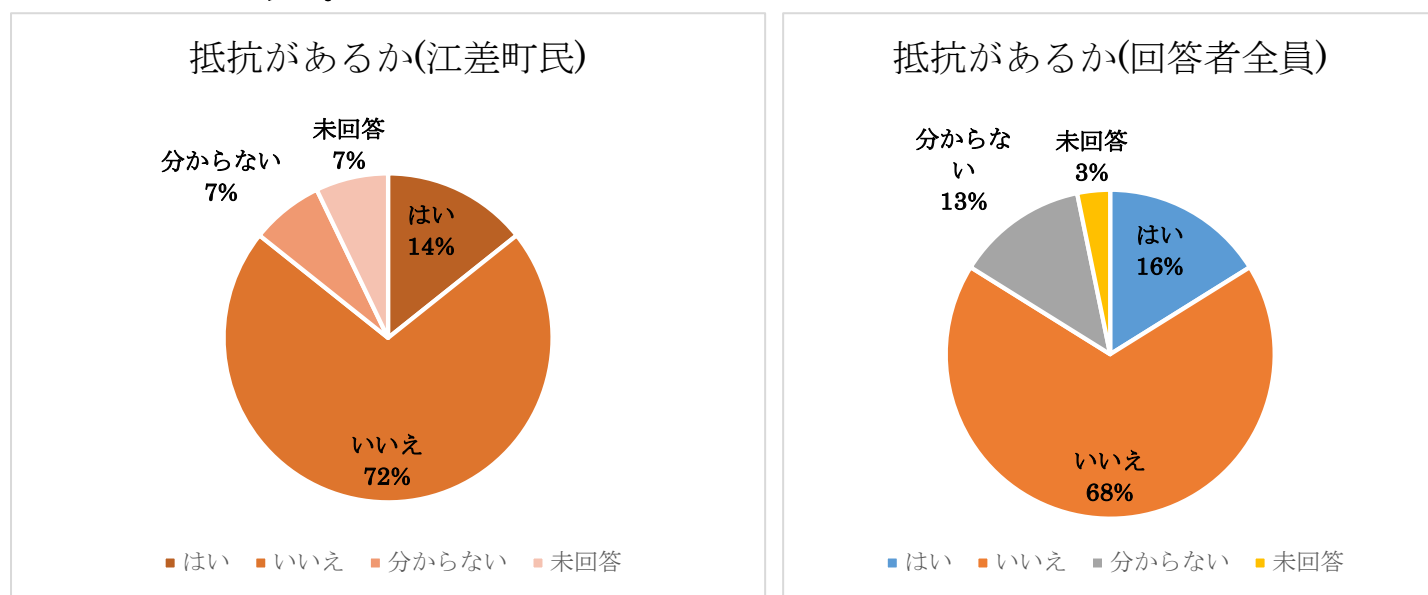
(図 3-3)

1-4. アンケート回答者の情報(職業)



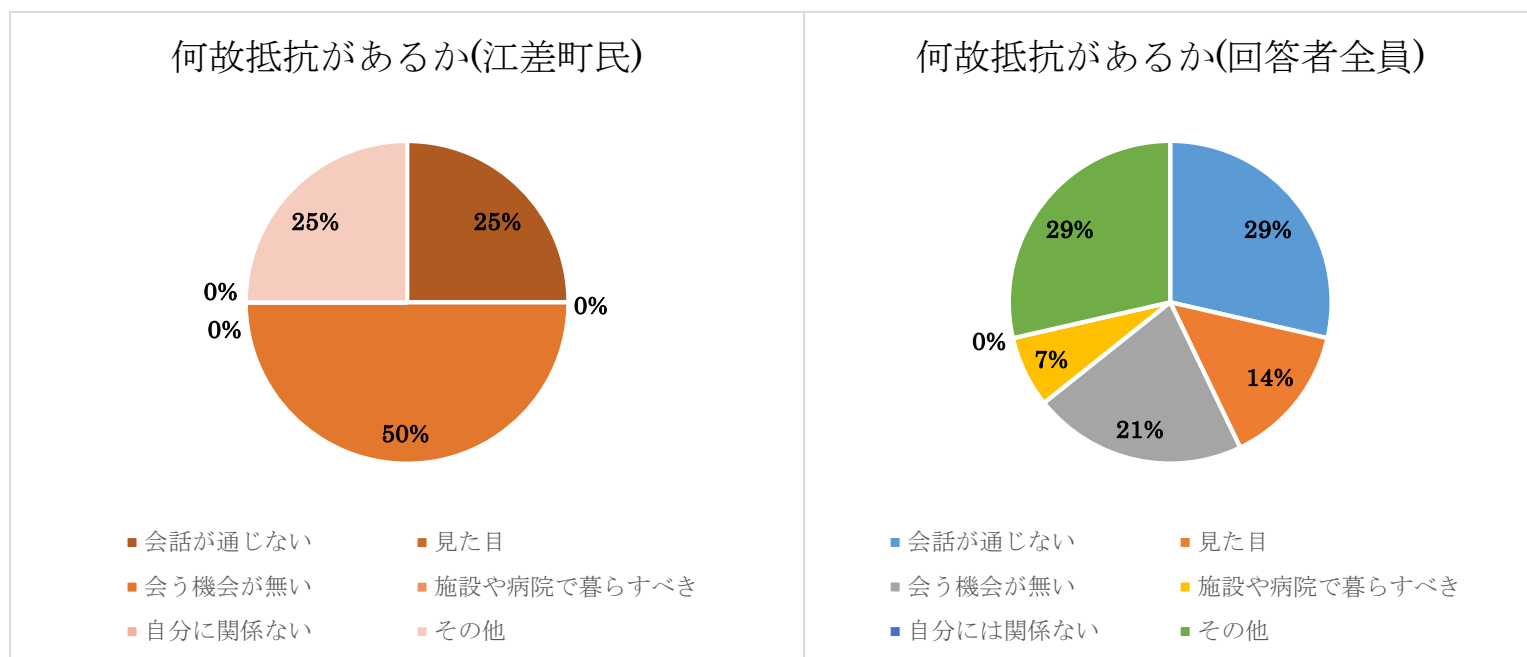
(図 3-4)

2. 障害を持った方(精神障害・知的障害・身体障害、認知症等)に対して抵抗があるかどうか。



(図 3-5)

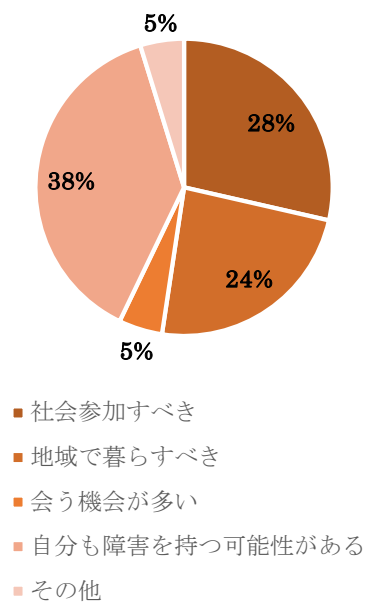
3. (2で「抵抗がある」と回答した人のみ)
どのようなことから「抵抗がある」と感じるか。



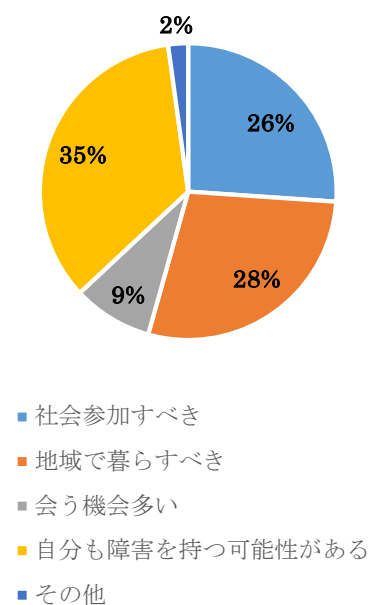
(図 3-6)

4. (2で「抵抗がない」と回答した人のみ)
どのようなことから「抵抗がない」と感じるか。

何故抵抗がないか(江差町民)

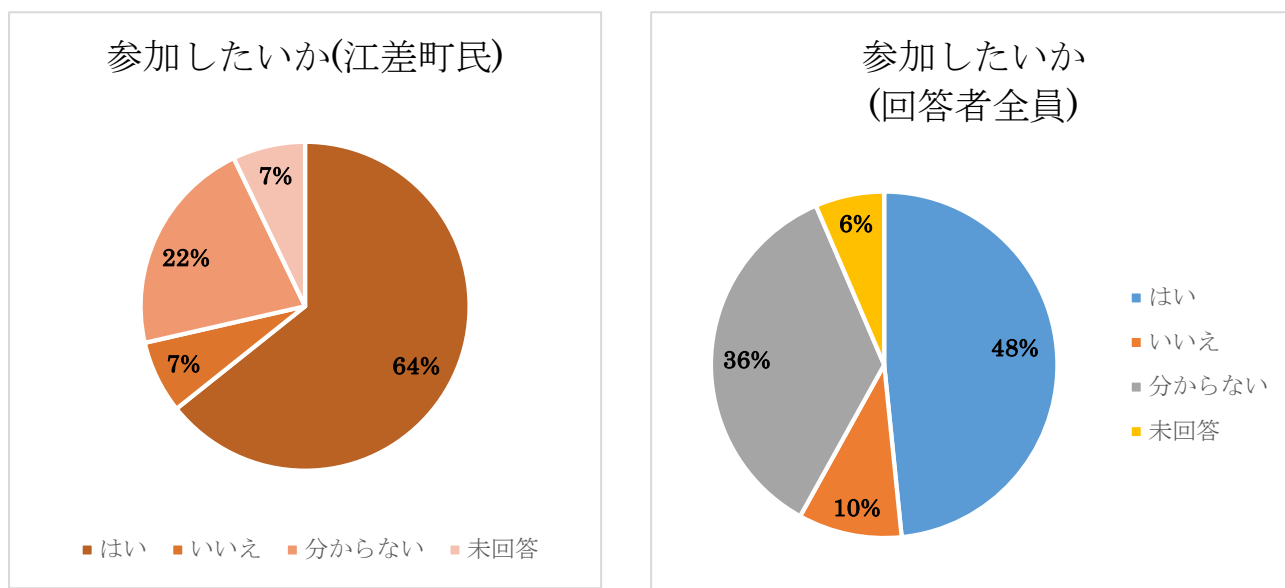


何故抵抗がないか
(回答者全員)



(図 3-7)

5. 障害を持った方と交流する機会、イベント等があったら参加したいと思うかどうか。



(図 3-8)

3-6 分析

「障害を持った方に対して抵抗があるか」という質問に対し、「はい」と回答した江差町民は14%、「いいえ」と回答した江差町民は72%だった。調査参加者全員だと「はい」と回答した者は16%、「いいえ」と回答した者は68%だった。

「何故抵抗がないか」という質問に対し、江差町民は「自分も障害を持つ可能性がある」と答えた者が最も多かった。調査参加者全員でもその回答が最も多かった。それに対して、「障害を持った方に対して抵抗があるか」という質問に「はい」と回答した江差町民は、「障害を持った人と会う機会がない」と回答した者が最も多かった。調査参加者全員だと、「会話が通じない」と回答した者が最も多く、「障害を持った人と会う機会がない」と回答した者は2番目に多かった。これらより、「自分も障害を持つ可能性がある」という考えを持つ障害者に抵抗がない者が多くいることが分かる。また、障害を持つ人との接触機会がないことから、障害を持つ人に対して抵抗があると思う人が多いことも分かる。

「障害を持った方と交流する機会、イベント等があったら参加したいと思うかどうか」という質問に対し、「はい」と回答した江差町民は64%、「いいえ」と回答した江差町民は7%、「分からない」と回答した江差町民は22%、「未回答」の江差町民は7%であった。調査参加者全員で見ると、「はい」と回答した者は48%、「いいえ」と回答した者は10%、「分からない」と回答した者は36%、「未回答」は6%であった。

アンケート結果より、障害者に対して偏見を持っている者よりも、偏見を持っていない者の方が多いことが分かった。そして、障害者との接触機会について前向きな考えを持つ人については江差町民だと約6割を占め、調査参加者全員だと約5割を占めるという結果となった。また、障害を持つ方と交流する機会があれば参加したいかという質問に対し「いいえ」と回答した者よりも「分からない」と回答した者が多かった。その点に関して、交流やイベントがどれくらいの人数の規模でどのようなことをするのかといった内容が示されていないことよりこのような結果が考えられる。

3-7 考察

江差町で暮らす身体障害、知的障害、精神障害を含む障害者は、全体人口の約1割を占めている。また、中でも身体に障害を持っている人が多い。観光資源は豊かな自然や歴史ある街並みが特徴であり、街を歩いてみるのが江差町の魅力を味わえる有効な方法である。アンケート結果より、江差町で暮らす人々は、障害を持つ人との接触機会に前向きな考えを持つ人が多いことが分かった。

従って、江差町でのユニバーサルツーリズムの実施の可能性はあると考えられる。江差町の観光資源の特徴や「娯楽性」「体感性」を持つものが好ましいことから、健常者と障害者が共に江差町の観光地をまわるというのが内容として挙げられる。直接的接触をすることができ、障害者が持つ能力や考えを知ることができる。また、江差町の魅力を共に味わうことで、同じ目標を達成し、偏見解消を促すことが期待できる。しかし、そういった内容を実施する上で問題となるのが移動である。参加する障害者の障害の度合いを踏まえつつ、介助者と移動手段の確保、安全に移動ができる観光スポットを要検討しなければならない。また、障害者を迎える環境を整える必要があることから、各観光施設の受け入れ態勢の強化も課題となる。

参考文献

- ・ 江差町

<http://www.hokkaido-esashi.jp/modules/towninfo/content0001.html>

- ・ 第 4 期江差町障がい福祉計画(平成 27 年度～平成 29 年度)

<http://www.hokkaido->

[esashi.jp/common/fckeditor/editor/filemanager/connectors/php/transfer.php?file=/lifeinfo/hoken_fukushi/syougaisya/keikaku/uid000016_30322E706466](http://www.hokkaido-esashi.jp/common/fckeditor/editor/filemanager/connectors/php/transfer.php?file=/lifeinfo/hoken_fukushi/syougaisya/keikaku/uid000016_30322E706466)

- ・ 社会福祉法人 江差福社会

<http://www.asu-inst.server-shared.com/shi-she-shao-jie/>

- ・ 文化庁 日本遺産

http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/

- ・ 文化庁 これまでに認定された「日本遺産(Japan Heritage)」一覧

http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/ichiran.html

- ・ 江差の五月は江戸にもない —ニシンの繁栄が息づく町—

http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/pdf/nihon_isan38.pdf

- ・ 江差町観光戦略書案 平成 29 年 2 月 7 日株式会社 JTB 総合研究所

- ・ 江差町人口ビジョン 江差町まち・ひと・しごと創生総合戦略 平成 28 年 3 月

- ・ バリアフリーホテルあすなろ

<http://barrier-free-hotel-asunaro.com/>

第4章 おわりに

4-1 結論

偏見とはある外集団及びその成員に対する否定的な態度である。偏見があることで差別行為が生じ、障害者の健全な社会生活を阻害してしまうこととなる。障害者の生活や精神の充実、また、社会に暮らす人々が障害に対する正しい理解を得るためには、偏見の解消が必要である。

偏見解消に寄与するためには、以下の条件が必要である。

- ①障害者と「直接的接触」をする。
- ②障害に関する「知識」を得る。

いずれかの条件を満たすことで偏見解消に寄与することが期待できる。

「接触」が図られる方法として、健常者が障害者と「直接的接触」する取り組みを取り上げたことを通し、各取り組みには以下の特徴を持つことが明らかとなった。

- ①到達目標に「啓発性」と「娯楽性」のどちらかが強いという特徴を持つ。
- ②健常者が得られる行動として「知識性」「体感性」のどちらかが強いという特徴を持つ。
- ③偏見への理解を実施目的としている取り組みは「単発性」が強い傾向にある。

以上 3 つの特徴と個別事例で挙げた「北海道ユニバーサル上映映画祭」より得られた分析を踏まえ、偏見解消の寄与が期待される条件は以下の 3 つとする。いずれも満たされると、偏見解消への寄与がさらに期待できる。

- ①健常者と障害者が直接的な「接触」を通し、障害に関する「知識」を得る。
- ②その方法には「啓発性」「体感性」「単発性」が強いという特徴を持つ。
- ③「直接的接触」は健常者と障害者が同じ目的を持ち活動するものである。

この特徴を盛り込めるものとしてユニバーサルツーリズムを用い、江差町での実施可能性を探った。江差町の住民を中心に実施したアンケート調査の結果より、江差町の住民は障害者との交流に前向きな考えを持っていることが明らかとなった。さらに、障害福祉の現状や観光資源を踏まえると、江差町でのユニバーサルツーリズムの実施の可能性は考えられる。しかし、介助者と移動手段の確保や安全に移動ができる観光スポットの検討、各観光施設の受け入れ態勢の強化が課題となる。

4-2 まとめ

本研究では、健常者が抱く障害者に対する偏見の解消に寄与することを目的とし、偏見解消を促すためにはどのような方法が有効か探ってきた。健常者と障害者が交流する取り組みを取り上げた調査と、主に江差町民を対象とした偏見に関するアンケート調査を実施したが、多くの事例数とアンケート回答数を得ることが出来なかった。より多くの数を集めることでさらに詳しい分析をすることができたと考えられるため、反省点としたい。また、江差町でのユニバーサルツーリズムの実施可能性を探り、そのツーリズムに盛り込める条件を考察したが、実際に行うところまでは至らなかった。ユニバーサルツーリズムを実施する上で、障害者の移動手段の確認や添乗員の確保の他に、旅行先である地域の受け入れ態勢や環境の整備も重要であることを再確認した。ユニバーサルツーリズムを実施するためには、地域が障害について共に考え、共に良くしていこうとする姿勢が大切であると考え。そして、江差町でのユニバーサルツーリズム実施に向けて続けて検討してきたい。「観光」という手段を用い、健常者と障害者が接触する機会を設けることを検討してきたが、様々な手段で社会に接触機会を設けることが必要となる。そのためにはまず、障害に関する正しい知識を得て、正しく理解することが前提となり、そういった知識を得る機会を設けることも積極的に考えていく必要がある。

謝辞

本研究を進めるにあたり、多くの方々のご協力とご指導に支えられました。

江差町役場地域包括支援センターの職員の皆様、江差町民の皆様、アンケートに回答して下さった皆様に、深く感謝申し上げます。江差町役場地域包括支援センターの職員の皆様につきましては、日々の活動や業務でお忙しい中、ヒヤリング調査やアンケート調査にご協力していただきました。アンケート調査を実施させていただくにあって、何度も連絡を重ねご迷惑をお掛けしましたが、丁寧に対応してくださいました。本当にありがとうございました。

池ノ上真一准教授、齋藤征人准教授からは貴重なご助言とご指導をいただきました。池ノ上真一准教授は多忙な日々を過ごしているにも関わらず、私の研究の進み具合を気にかけてくださり、励ましの言葉を踏まえつつご指導していただきました。齋藤征人准教授からは主に福祉の視点からの的確なご助言をいただき、内容の充実はもとより今後の展望を示唆することができました。お二方に深い感謝を申し上げます。

付録資料

障害者への偏見に関する調査

各問いで当てはまる番号に○をつけてください。

1. あなたご自身について教えてください。

性別	①男性	②女性		
年齢	①10代	②20代	③30代	④40代
	⑤50代	⑥60代	⑦70代以上	
お住まい	①江差町内	②函館市	③他の道南地域	④道央
	⑤道北	②道東	⑥その他()	
職業	①勤め人(会社役員、会社員、公務員等)			
	②自営業(農業、漁業含む)			
	③主婦	④学生	⑤無職	
	⑥その他()			

2. 障害を持った方(精神障害・知的障害・身体障害・認知症等)に対して、あなたご自身は抵抗があると思いますか。

- ①はい ②いいえ ③分からない

はいと答えた方のみお答えください。

3. どのようなことからそのように感じますか。(複数回答可)

- ①会話が通じない ②見た目 ③日常生活で会う機会がない
④障害を持った方は施設や病院で暮らすべきだと思う ⑤障害は自分に関係ない
⑥その他()

いいえと答えた方のみお答えください。

4. どのようなことからそのように感じますか。(複数回答可)

- ①障害者も社会参加すべきだ ②障害者が地域で暮らすのは当たり前
③日常生活で会う回数が多い ④人は誰でも障害を持つ可能性がある
⑤その他()

5. 障害を持った方と交流する機会、イベント等が身近にあったら参加したいと思いませんか。

- ①はい ②いいえ ③分からない

6. 障害を持った方と交流したときのエピソードやそのとき感じたこと、障害者に対する偏見について何か考えや意見等がございましたら教えてください。

ご協力ありがとうございました。

障害を持った方と交流したときのエピソードやそのとき感じたこと、障害者に対する偏見についての考え、意見	障害を持つ人に対して抵抗があるか
偏見を解消するには周囲の理解(教育)が必要。	いいえ
隣人が知的障害者、うるさい、苦情を言っても立ち会ってくれない。	はい
全く知らない地域の人視点、素人面を常に持つ必要がある。	いいえ
障害者の皆さんが作った製品は素晴らしい、彼らの力は素晴らしい。	いいえ
何回言っても同じことをやる、会話が通じない。	はい
コミュニケーションがとれるとお互い感じあえるものがある、自分に手伝えることがあれば協力したい。	分からない
障害者の方は生活する中で必要な情報が入ってきづらい、健常者が気付かない部分で困りごとが生じている。	いいえ
会話が通じなくても熱心に聞き取ることが大事。	いいえ
障害者と接することが障害の理解となるような気がする。	いいえ
施設に合唱のコンサートをしに行った、ガイドのサポート経験あり。	いいえ
実際に身体障害者と接してみて接する機会が必要だと感じた。	分からない
知識がないからどう対応していいかわからない。	いいえ
認知症だった祖父の介護経験あり、どんな元気な人でも突然障害を持つことがある。	いいえ
母が障害者支援施設で働いているため接する機会がもともと多かった。障害者が持つ能力を活かせる場所が増えたらよい。	いいえ

結果の処理

アンケート内の「障害を持った方と交流したときのエピソードやそのとき感じたこと、障害者に対する偏見について何か考えや意見等がございましたら教えてください。」という自由記述を求める質問に対し、回答のあったもののみを表にまとめた。また、「障害を持った方(精神障害・知的障害・身体障害・認知症等)に対して、あなたご自身は抵抗があると思いますか。」という質問に対する回答も表に記載している。自由記述に関しては、内容を要約し、誤字は訂正した。